

# 目の大げがあればこそその自分

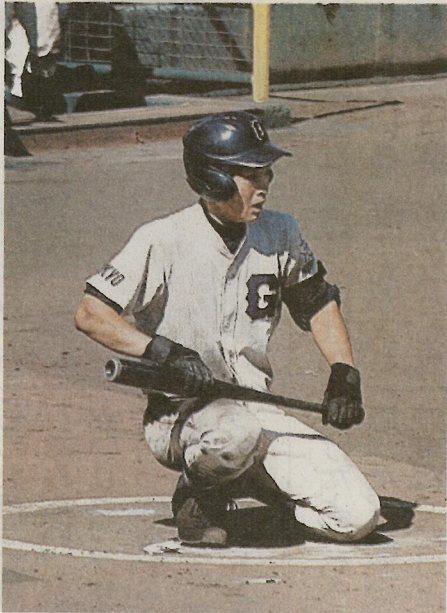
## スコアシート

青 稜7-3学習院

ネクストバッターズサークルで、涙があふれてきた。4点を追う9回裏、ツアアウト。学習院の主将・永田敏也君（3年）は立ち上がった。

カウント1-2から内角にきたスライダー。ずっと苦しんできたコースだが、よく見えた。力いっぱい振り抜き、懸命に一塁へ——。強い打球は三塁手を強襲し、内野安打になった。すべてはあの出来事から始まった。

### 学習院・永田敏也主将



追い詰められた9回裏。学習院の永田敏也君は次打者席で試合をみつめた。府中市市民

「野球部を辞めます」。高校に入ったばかりの4月末、練習後に監督に言おうと決心していた。中等科時代の同級生が辞めてしまいい、部活が面白くなくなっていた。どうやって切り出そう。考えこんでふと顔を上げると、目の前に硬球の縫い目が見えた。次の瞬間、ヘルメットが吹っ飛び、頭が後ろにのけ

ぞった。打撃マシンを打ち返した球が防球ネットをすり抜け、隣のマシンに球を入れていた永田君の左目を直撃した。近視でふだんからコンタクトレンズをつけていたが、左目を探しても感覚がない。右目を手で覆うと視界が真っ白になり、何も見えなくなった。病院の診断は「左眼窩底

骨折」。鼻の骨も砕けていた。手術後の視力は裸眼で0.01。視界の左上が欠け、真ん中あたりにチカチカと大きな光が見えた。入院生活は3週間続いた。何もすることなく過ごす病室に、監督やチームメイトがお見舞いに来てくれた。みんなと話をしていると、なんだか体がうずいた。「やっぱり野球が好きだったんだ」

退院して家に戻ると、自分の部屋に直行した。高校の入学祝いに両親が買ってくれた真新しいグラブを手にはめる。何度も磨いた。野球部に戻って徐々に体を慣らしていったが、左側の飛球は距離感がわからず、球がグラブをすり抜け

た。「守備がダメならバットを振った。努力は実り、レギュラーを任された。打順は1番。守備は、左から打球がくることがない一塁手。そして主将にも指名された。「無口で人を怒れないタイプ」だが、根気強く部員と話し合った。

「『いま』に全力を尽くそう」。挑んだこの日の試合では、守備の時、一球ごとに一塁から声を張り上げた。最後の一打席までバットを振り抜いた。

勝つことはできなかったが、達成感が残った。「けがを悔やんだことは一度もありません。けががあったから、今ここにいます」「これからも、野球を続けたい」。涙を拭いて、明日を見据えた。

(中村真理)

【青稜】	打	安	点
石川	5	1	0
保田	2	1	0
森本	2	3	0
磯横	4	4	4
河名	4	4	4
榎	4	4	2
併	2	1	0
残	2	1	0
振	8	3	5
球	4	1	8
振	8	4	3

【学】	打	安	点
習	4	2	1
古	3	1	1
久	4	4	4
安	4	4	3
福	3	2	1
松	2	1	1
二	1	0	0
大	4	4	4
淡	3	2	1
山	2	1	0
併	1	0	0
残	1	0	0
振	5	4	3
球	4	1	8
振	5	4	3

投手	回	安
磯久	6	5
保田	3	5
大城	9	10

木村	大城	青
久保	田	2
1	1	1
2	2	2
1	1	1
2	2	2
1	1	1
2	2	2
1	1	1
2	2	2

青学	0	0	1	4	0	1	0	1	7
習院	0	0	1	0	0	2	0	0	3